

思いは

いつも

自分が表

松井 憲一

『2026年難波別院カレンダー』9月のことば

掲示板のことば

父のもとで仕事を始め、8年近くが経つ。その間、何度父とぶつかったか分からない。なかでも忘れられない出来事がある。

ある時、父が始めた事業に大きな問題があることが分かった。事の重さに私は焦り、一方的に父を強く責め立てた。「父が事業を始めなければ」「父がきちんとしてくれてさえすれば」、そんな愚痴が止まらなかった。憤る私に対し、父は言い返すこともなく黙っていたが、最後に「将来、お前の助けになると思ったんだ…」と言だけ呟いた。

それ以降、父は明らかに落ち込んだ様子であった。そんな父の姿を見るにつけ、私は自身のあり

方が本当に嫌になった。

今在る私は、様々な父からの「私のために」というところを身に受けているはずである。しかしそこには、どれだけ私のためであっても、結果が自分にとって不都合であれば、その事実をどうしても受け入れられない私があった。私の思いはどこまでも自分の都合が中心であり、そこを一歩たりとも離れられなかった。

ただ、そのことが痛感されるところに、父からの「私のために」というところが余計に身に沁み、申し訳なさを感じた。そして、その申し訳なさ私の頑なな心を徐々に溶かしていった。

父とは未だにぶつかってしまうが、その度にこの出来事が思い出される。

(大阪教区教化センター)

今月のことば

如来の光瑞希有にして

阿難はなはだこころよく

如是之義ととえりしに

出世の本意あらわせり

どこにもないのか
もしれません。

仏教では、この
世のすべては刹那
ごとに変わり続け
ていると説きま
す。人も、表情も、
心も、一瞬で移り

あなたは今日、誰かの
顔をちゃんと見ましたか。

毎日会っている人ほど、
見ているようで見ていな
いことがあります。「いつ
もの人」になってしまっ
と、少し顔色が悪くても、
なんとなく元気がなくて
も、その変化に気づくこ
とができません。家族で
も、職場の同僚でも、い
つのまにかそうなってい
ることがあるのではない
でしょうか。

しかし本当は、「いつも
通り」などというものは、

変わっている。昨日と同
じように見えるあの人も、
今日この瞬間は、昨日と
は違うその人です。私た
ちはついそれを忘れて、
「いつも通り」と決めつけ
て見てしまいがちです。
そうしているうちに、そ
の人の今この一瞬を、す
るりと見逃してしまっ
ているのかもしれない。

今から約二千五百年前、
お釈迦さまのお弟子で阿
難という人がおられました。
毎日、お釈迦さまの
すぐそばに仕えて様々な

お世話をされている方
です。ところがある日、阿
難はお釈迦さまのおすが
たを見て、はっとします。
今日のお顔は、今までと
は違う。心身ともに安ら
ぎと喜びに満ち、顔は光
かがやいている。阿難は
その一瞬を、しっかりと
受け取りました。

阿難は、感じたままを
口にします。「今日はど
うなさったのですか」と。
その問いに応えるように、
お釈迦さまは語り始めま
した。自分がこの世に生
まれてきた、本当の意味
を。それがやがて、親鸞
聖人のご和讃となりお念
仏の教えとして私たちの
もとに届いてきました。

阿難がお釈迦さまの本
当のお姿に気づいたあの
一瞬から始まった教えを、

その後も一人ひとりが大
切に受け取り、念仏とし
てつないできた。その長
い道の、いちばん先にい
るのが、今の私なのだと
思います。

そう気づいたとき、ふ
と問いたくなります。私
はちゃんと、目の前の人
を見ているだろうか。
私たちはどこまでも自分
の思い込みの中で生活し
ています。しかし、周り
に目を向けると、今日こ
の瞬間のあの人は、もう
二度と同じ姿では現れな
いのです。

大切な人の「今」を、
見過ごしたくないと、そ
う思います。（秦 真宣）

今月のことば出典『浄土和讃』

『真宗聖典』（初版）483頁

（第二版）578頁

『増補 真宗大谷派 勤行集』

（青本）127頁

「へ知ってる？ 仏事のあれこれ」

「お布施」ってなあに？



「慈悲の心であまねく施す」

門真市 西稱寺 宮部 渡

先日、お名前も名乗らず

「近所に引越してきたものです」と、突然のお電話がお寺にかかってきました。「親の法事を勤めたけれど料金はおいくらですか？」と、矢継ぎ早におつしやられ大変面くらいました。戸惑いつつも、「お布施のことですね？とくに決まりはありません」とお答えすると、「じゃあ結構です」ガチャリと電話を切られてしまいました。実は多くのお寺がこの出来事と似た経

験をされているそうです。

現代社会においては読経などを行ってもらう対価（料金）としてお金を支払う、という感覚をお持ちの方が増えてきているように感じます。この機会に本来の「お布施」の意味をお釈迦様の時代にさかのぼってたずねてみましょう。

インドでは布施を元来「ダーナ」と言い慈悲の心であまねく施す（喜捨）を意味します。具体的には①法施（仏法を説き聞

きかしめる）②財施（金銭、衣食などを施す）③無畏施（畏れのない安心を施す）の三種に分けられます。皆さんが仏事でご用意頂くお布施は、②財施にあたります。お金というと現代の感覚では、物品を購入したり、サービスを受けるために「支払い」として用いるものでしょう。そのため、いつの間にか本来の②財施の意味が消え失せてしまっているようです。

先にご紹介したお電話の「親の法事」を例にとるなら、ご縁の深い亡き人への追慕の思いが、同時にわがいのちの本当の尊さへの気づき、また仏さまへの報恩報謝へとつながる大切な場なのです。日常生活において貴重な

①法施③無為施がかたちとなる場、と言えますでしょう。その喜びとして、②財施、財を喜捨するという気持ちで自然と起こり、「志」や「お気持ち」として表現されているのではないのでしょうか。

ですから、本来「お布施」には値段がつけられません。どうぞ、その意味合いをご理解いただき、志、お気持ちとしてご用意くださればと思います。しかし、ご門徒の間や、地域で金額の取り決めがあったりする場合もあるようです。その場合は、それに準ずるのもよいでしょうが、どうか、支払いや、料金などではなく、亡き人への、仏さまへの喜捨であることを忘れず、お願いいたします。



仏教マンガ・仏さまのおしえ



絵：小川ゆきえ〈254〉

